

にの六話 RECALL THE PAST

「凄い・・・綺麗・・・」

姫はこの一面の花畑を気に入ってくれたようだ。

「アリス・・・ありがとう。私の我侭聞いてくれて。」

そう言い。姫は久しぶりに満面の笑みを浮かべた。

ああこの笑顔に私は・・・

この笑顔を見れたのだ。命令違反をしてもつれてきて良かった。

「ねえ、アリス。この花なんて言うの？あつ、この花もいいな・・・」

姫は花を踏まないよう肩膝をつき、花をどんどん見ていった。
それからはとても楽しかった。

でも、その時間は終わる・・・

「あつ・・・この花・・・」

そう言い姫は一つの花を抜いた。

その花はまるで血のように紅く、少し不気味だった。

「この花も綺麗ね・・・」

「そうでしょうか？私は不気味に・・・」

「だってこの花・・・。」

そう言いながら姫は私の方へ振り返る。

「今の私のよう。」

その姫の姿は姫の言う通りその花のように血まみれだった。

「ああああああ！！！！」

悲鳴とともに私は目覚めた。

■は、私はまだあの時から開放されないのか？
私があの時やったことはやはり間違いだったか？

コンコン、

ふとノックの音が響いた。

「私。」

この声はマキか・・・ならすぐ入れてもいいな。
私が招き入れるとすぐにマキは入って来た。

「どうしたの？隣の部屋まで聞こえてたよ？アリスの悲鳴。」

マキが普通に喋っている。それぐらい心配してくれているんだろ
う。

「ありがとう、でもなんでもない。ちょっと悪い夢を見たただか

ら。」

「そ、そう・・・ならもう聞かないけど・・・」

「ああ、心配かけてすまない。」

「べつにいいよ。でもアリスは次の戦いの要だし、第一私たちの大切な仲間なんだし、なにか相談したいことがあったらいつでも相談していいよ。」

そう言つてマキは部屋から出て行つた。

仲間か・・・

かつて他にも私には仲間がいた。

ともに戦場を駆けた仲間がいた。

ともに笑いあつた仲間がいた。

でもその仲間たちはあの時を境に仲間ではなくなつた。

まあ、敵にならなかつただけマシか。

なんたつて私は姫を殺した逆賊らしいからな。

闇だけが支配する世界をわいは一人で歩いとつた。

なんでここにおるんかもわからん、何で歩き続けとんかもわからん。ただ歩き続けていた。すると、

『久しぶり、“最速”。』

「!？」

かつての呼び名を呼ばれ、堪らず振り返った。
そこには黒い、何かがいた。

「な、なんやお前は・・・」

『何ってわかつてるでしょ？』

ま、まさか・・・

『私は、俺はお前が捨てた過去のお前。』

何かは形を変えた。

黒いぼろを纏い、顔は不気味な仮面で覆われいて、神はかなり短めだ。

まさしくそれは昔のわい・・・いや俺。でも、

「違う、違う！！！！わいはフウキやああ！！！！」

あの時、フウガに助けられた時正直嬉しかった、これでこの過去を捨てられると思ったから。

『違いなどしない、俺はお前だ。たとえ髪型を変えても、喋り方を変えても、素顔を晒すようになっても、前は過去を捨てることなどできない。』

「違う！！！！！！」

そしてわいは走り出した。
過去から逃げ出すために。

しかし俺から幾つもの黒い手が現れ、俺に迫ってくる。

「ああああああ！！！！！！！！」

それを必死に払う。でも払いきれず手はわいを捕まえる。
そして俺に引きづり込まれていく。

『諦める、お前は過去を捨てることなどできない。受け入れろ、自分が暗殺者であることを！！』
「くそおおおお！！！！！！」

いつのまにか目が覚めた。
全身が汗でびっしょりやった。

「ずいぶんうなされてたな。」
「！」

顔を起こすとそこにはフウガがいた。

「な、なんで・・・」
「アホか、同じ部屋だろうが。」

そ、そっぴやあそやったな。

「なあ、フウガ・・・」
「なんだ？」

「過去を捨てることってできんのんやろうか・・・？」

なんとなくフウガなら答えたいくれるような気がした。でも、

「知るか。」

返ってきた言葉は期待していたのとはまったく違った。

「だって俺には捨てたい過去なんてないからな・・・わかんねえよ、そんな事なんて。」

確かにそやな・・・

「悪い、フウガ・・・」

「気にすんな、でも一つだけいいか？」

・・・？なんなんやろ？

「たぶんな、否定しているうちは捨てることなんてできないと思う。いつまでも追ってくると思う。」

「・・・！」

「じゃ、俺はリンの修行に付き合わなきゃなんねえから。」

そう言ってフウガは部屋を出て行った。

「否定しているうちは捨てれんか・・・」

ただ命令にしたがい、自分が生きていくために人を殺してきた日々。

どれほどの血を浴びてきたか？

何人の人間を殺してきたのだろうか？

「わい、捨てれるんな・・・」

今度は答えてくれる人は居ない。

にの六話 RECALL THE PAST（後書き）

リイ「後書きよ、私は帰ってきた！！！」

んな、元ネタがよくわからんパクリすんな！！

シーク「いやでも本当久しぶりだね。いままでずっと本編だったし。」

ついでにもう一回外伝として出します。

「マジッスか！！？」

マジ。

リイ「どんな話なのよ？」

とりあえずお前たちに、番外編で名前だけ出たセツナ。後ハルシオンも出そうかなって思ってる。

シーク「へえ・・・ていうかセツナって・・・」

気にしない。

シーク「まだ何も言っていないんだけど。」

まあ、それは置いて、ちょっと来週も次話を投稿できるかどうかわかりません。

リイ「へっ、なんで？」

実は・・・テストまだ終わってない♪

「勉強しろ！！！！」

にの七話 前菜的な話を少々（前書き）

次話から話を進めます

にの七話 前菜的な話を少々

ただなんとなく歩いていると俺は彼女に会った。

俺の周りの女性といえばリンとマキさんだが二人とも客観的に見れば美しいが、その人はそれとは違う美しさだった。

黒っぽい茶色の髪を背中まで伸ばしていて、白銀の目はなににもかを見通しそうだった。

またとても凜とした顔つきで、背筋もぴんと張っていた。
まるで、騎士のようだった。

こちらの視線に気づいたらしく彼女はこちらを向き、あろうことが近づいてきて、

「どうしたんだ、ウィル？」

たしかに俺の名前を言った。

「な、なんで俺の名前を・・・？」

「はっ・・・？」

俺の問いに彼女は理解できないと言いたげな顔をした。

「いや、なんでって私が君の名前を知ってるのは・・・」

そこで彼女はハッとしたような顔になって自分の髪に手をかけた。

「あ、あは、あはははは。」

それで何かに気づいたようで、あいまいに笑うと、

「し、失礼!!」

「あつ、ちよつ・・・」

急に走って逃げてしまった。

ええと、なんだったんだろうか？

あれ？そう言えばあの人・・・誰かに似てるような・・・？

「あゝフウキ」

「げっ。」

特にやることもないし、適当に町あるいとならやな奴にあつてもうた。

「フウキ」 “げっ” ってゝなんですか？ “げっ” ってゝ

あゝ無意識にそう言ってたようやな。

正直に言つとわいはマキが苦手や。なんでかゆつと・・・

「まあゝそれはゝ別にいいですよゝにしてはゝ本当いいですよね！
！フウキはフウガ様と同じ部屋で!!!」

普通に喋りだしてもうた・・・こりやめんどくさくなるわ。

理由話す前に一つ言うけどわいとフウガは血つながってないけど、
兄弟やし仲はええんや。

それがマキは不満のようみたいなんや。

それでわいにいちいちつかつかってくるんや

「聞いてるんですか、フウキ!!?」

「はい、はいきいとるで。」

ああもうこのフウガLOVE女は・・・

「最近フウガ様私にあんまり構ってくれないし・・・!!」

ああゝ愚痴モードに突入した・・・

なんでこんなんがサキモリ・カエデ両方でも五指に入るほどの実力者なんやろ?

しかも悪いやつやないから余計性質悪いんや。

「そういえば聞いてくださいよ、この前なんかフウガ様・・・」

ほんま疲れる・・・

「っ、疲れたゝ」

とても深く息を吐きながら、私は壁にもたりかかるように尻餅をついた。

私・・・リンは一昨日からライムとフウガに修行に付き合ってもらっていた。

マナ・・・いやギアは全然本気を出していなかった。

あのままでは全力で戦っても敵わなかった。

だからこそ物凄いスパルタで頼んだんだけど・・・

か、かなりきつい・・・

あの時はすでに夕方に近かったから実質一日で強くなるためにはそれでもまだ足りないと思うけど正直もう立てそうにない。

とりあえず荒い息をできるだけ整えようとしていると、
「・・・湧け、癒しの象徴。今彼のものの疲れを癒せ、“リフレッシュー”」

突然魔法により発生した水が私の全身を包んだ。

魔法だけあり水の中だけど呼吸ができないことはなかった。

その水はだんだんと私の中に入ってきて、全部消えた。

それによって全快ってほどでもないけど大分楽になった。

「ありがと、マオウ。」

「・・・どういたしまして。」

私は立ち上がりながら魔法をかけてくれたマオウに礼を言った。

「・・・ねえ、リン。」

「・・・？なんなのかな？

「・・・どうして、急に焦って強くなろうとしてるの？」

「・・・まあバレルか。

「友達のため。」

簡単な言葉だけど紛れもない私の本心。

「・・・そっ・・・か・・・、うん、分かった。」

マオウは深くは問わないでくれた。でも、

「・・・ただ、相談したいことがあったらいつでも言って、頼りたくなったらいつでも頼って・・・」

それから一度言葉をきり私の目を見据え、
「僕も友達だからね。」

うん・・・そうだね。

「ありがとう、マオウ。」

「・・・どういたしまして。」

昨日突然リンに私を鍛えてと言われた。

まあ断る理由もなかったし、人に教えるのもいい勉強になるとい
うし、第一リンは魔法を全属性使えるから教えておきたかったこと
もあつたし引き受けた。

ちなみにその時遇全一緒にいたフウガも付き合っていた。

俺はそれと俺の魔法の技術を、フウガは自身の格闘技術をここ二
日で叩きこんだ。

ちなみに明日はどうも用事があるらしいから休みだが、
しかしリンを鍛えていて一つ思ったことがある。

「リンって上達が早いな。」

あれも基礎だけとは言えほとんど修得してきてるし。

「ああ、ほんと教えがいがある。」

フウガもそう思ってたようだな。

「ええ、私も見ていて面白かったです。」

「いや、なんで当然のようにいんだ、ハルシオン!!」

いつのまにか俺の隣には見た目天使でも鳥人のやつがいた。

「そこに面白があるからです。」

「お前本作者の意図したキャラとは間逆のベクトルを進んでるな。」

“これはこれでかなり気に入ってるけどね。”

「っってお前昨日の!!」

「?・・・ああ、フウガが昨日言ってたのはハルシオンのことだったのか。」

「おや一日ぶりですね、フウガさん。」

「?なんで俺の名前知ってたんだ?」

「細かいことを気にしたらそこで人生終了ですよ。」

「重ッ!!?」

「・・・相変わらず絶好調だな、お前は。」

「まあフウガさんをからかうのはこれくらいにして・・・」

「なあ、ライムこいつ殴っていいよな? いいよな!!!!」

「・・・気にしたら、負けだ。」

「これを渡したかったんです。」

「?」

そういつとハルシオンはどこからか二枚のチラシを俺たちに渡してきた。

「それでは!!」

受け取るとハルシオンはすぐに飛んでどっかに行ってしまった。
まあとりあえずそのチラシを見て・・・

「賞金100万ウォン!!?」

でかでかと書かれたその単語に思わず大声で驚いた。
そしてその詳細を見た。

「あつ、そうだ。」

ライムさん達にチラシを渡して、サクラ様の下へ帰ろうとした時
ふと思いついた。

「私も出たら面白そうだ。」

今からライムさんたちの驚いた顔が浮かぶ。
ふふふ・・・明日が楽しみです。

そして大会は始まる。

にの七話 前菜的な話を少々（後書き）

リイ「さて、次からやっとな編が進むわけね!!」
な、長かった・・・

シーク「番外編を抜いたらまだ六話しかやってないけどね。」
うっ。

リイ「番外編といえば、外伝っていつやるの?」

ああそれはプロビンスサインでの話を終わらせてからやるつもり。
シーク「へえ、じゃあ次の話が終わったら?」

いやもう一つ山場となる話があるよ。それから日常をもっ少しやるつもりだし。

リイ「・・・ねえこの小説何話は書くつもり。」

軽く二百いくだろうな。あくまで予定だけど

シーク「いつ終わるんだろうね・・・」

・・・もっとがんばります。

にの八話 太陽は昇り始める 〵1〵 (前書き)

これより我は完全に不定期に入る!!!!!!

(週一、最低でも二週間に一回は更新します。)

にの八話 太陽は昇り始める Ⅰ

「うわ」

思わずだらしなく声をあげてしまった。

ギアからもらったチラシに書いてあった地図どおりに進んで辿り着いたところには一昨日見たサキモリの館には全然及ばないもののそれでもかなりの大きさを誇るコロシウムが建っていた。

そのコロシウムにはここから見えるだけでも五個ぐらいの入り口があった。

私は自分から一番近い入り口からコロシウムに入る。

中は回廊のようになっていてさらに中心に幾つもの柱で区切られた中庭のようなものがあつた。

その中央にリングがあるしそこで戦うのだろう。

他にも幾つか階段とちょうど私の真正面に受け付けがありそこには作りものだとバレバレの笑みを浮かべている、女の人がいた。

「観戦ですか？それとも参加者の方ですか？」

その人は作り笑いのままそう私に尋ねてきた。

参加すると答えると「それではこちらの紙をどうぞ。」と、言い私に手帳ほどの白い一枚の紙を渡した。

その紙をじっくりと見てみたけどどう見ても何も書いていなかった。

「これは・・・？」

そう呟いたら、「始まつたら分かりますよ。」と返ってきた。

「それではこちらへどうぞ。」

その人は中庭のほうへ腕を向けた。

私はその指示に従って柱のすき間を通った。

中庭には天井がなく太陽の光が直に差して来た。

そして周りを見てみるとすでに何人も殺気立った、参加者である人たちが集まっていた。

その殺気立った空気に馴染めないでいると、前方から私に近づい

てくる人がいた。

ていうか知り合いだ。と言っても外見の描写は一回もされていないが、しょうがない今やるか・・・あれ？私急に何言い出してんだろっ？・・・まあいいや。

“どうだ我がゴッド・フィンガー（ようは作者の文字打ってる指）の威力は。”

ウィルと戦ったアスという人とはまた違った、明るそうな茶色の髪をそれなりに長く、でも私よりは短く背中あたりまで伸ばしていて、フウガの撃退（？）の原因になったマキという人のように外に跳ねている。

ちなみに目も同じように茶色だ。

そういえばマオウはマキの弟だからこいつ・・・マナイやこちらを挑発しているような攻撃的な目をしているからギアか・・・もマキの妹だから遺伝なのだろうか？

ただマオウたちとは違い背は高く大体私よりも十センチぐらいは大きい。

また身体の魅力的なところ・・・ぶっちゃけ胸・・・の肉つきもよくかなり大人っぽい。

顔は彫が深く小さめでとても整っている。

町を歩けば十人はおるか百人は軽く振り返るであろう美貌だった。でもそれは先も言った、ギアの攻撃的な雰囲気で台無しになっている。

「よう。」

ギアは私に親しげに右手を挙げながら話しかけてきた。

「・・・・・・・・」

私はそれに反応こそしたけど無言で通した。

「おいおい無視すんなよつれないな。こちらら大勢に殺気向けられまくってて一人じゃ結構大変なんだよ。」

「・・・？なんで？」

「おっ、やっとな。」「

むっ・・・しまった。まあ別にそんなにこだわることもないしいいか。

「そんなことは別にいいよ、それよりなんで恨み買ってたんの？」

まあなんか想像つくけど。

「まあ正確に言つと逆恨みだな。この大会は年に三回行われてんだがな・・・」

ギアはそこでもつたいたいぶるように間を置いて、

「俺はここ五年間全部優勝している。」

「！！？」

そ、それって十五回連続で優勝してるってこと！！？

「ふっふっふ、どうだ参ったか。」

ギアはまるで子供のように笑いながら威張った格好をする。

しかし急にグイッと私の顔に自分の顔を近づけてきた。

その距離はほとんど無いに等しい。

多分ギアは自分のことを俺と言っているし雰囲気もそうっぽいから男なのだろう。

そのせいか女のマナの外見だというのにドキドキしてきて、頬が少し赤くなった。その距離を保ったまましばらくして

「別に逃げてもいいぞ。」

先とは違う理由で顔が赤くなった。

「舐めないでよ！！！！」

私は周囲の目が私に向ってくるのも気にせず叫んだ。

「おお、怖い怖い。」

ギアはわざとらしく怯えたような格好をした。

それが余計に腹立たしくなってくる。

なんでこんなのがマナの別人格なのだろうか？

「長らくお待たせいたしました。」

そんなやりとりをしているとどこからかアナウンスが流れてきた。

「先ほど受け付け終了時間を終えましたよってただいまより武闘会を始めたいと思います。」

その言葉を聞き周囲の殺気が増した。

それは私に向けられたものではないというのに少し怖気ついてしま
うほどだった。

「まず始める前に説明いたします。この武闘会は抽選式です。」

・・・？どうということ？

「もう知っている人がいるでしょうが、一回戦、その試合ごとに受
付の時に渡された白い紙に、二試合目なら二と浮かび上がります。
数字が浮かび上がった二人がその試合の出場者となります。なお一
回戦は全八試合となっております。」

えっ、ていうことは・・・

そして私は周りを見渡す。

ここに居る人たちは軽く二百人は超えている。

このなかから十六人しかでれないの！？

どうしようこのままじゃギアと闘うこともできないかも・・・

そんなことを考えていると誰かの手が私の右肩に乗せられた。
振り返ってみると、なんとなく分かっていたがギアだった。

ギアは私が振り返ったのを確認すると唇を少し吊り上げ、

「なんだ？出れるかどうか不安なのか？」

「なっ・・・余計なお世話だよ！」

でもギアは私が言った事などまるで聞いていないかのように無視
し、

「大丈夫だ。多分お前は出れるだろ。」

そう言った。

何でかは分からず聞いて見ようと思ったがそれどころではなくなっ
た。

なぜなら・・・

「それでは一回戦第一試合の抽選を始めます。」

私はその言葉を聞き急いで自分の紙を取り出して見る。

でも数字は浮かび上がり紙は依然として白い紙のままだった。そのことに私にしては珍しく不安になってのどの奥がムズムズしてきた。

「確かに浮かび上がっていますね。選手が決まりました。」

その言葉で、聞こえた方を向く。

いつの間にかリングには審判らしき人と選手であろう二人の後姿があった。

ていうか、どこかで見たことあるようなあの二人……

ちよつどその二人が振り返る。その姿を見て脳がフリーズを起こした。

「一回戦第一試合はナルシスVSマオ・サキモリ!!!!!!」

私の目と耳が狂っていないならこの二人は知り合いだ（片方怪しいけど）

ええと、うん。

[illegible]

にの八話 太陽は昇り始める ｝1｝ (後書き)

リイ「さてやつと始まつたわね!!」

は「はっはっは、速くバトル書いてええええ!!!」

シーク「うわ!? なんか作者のテンションが以上に高い!!」

リイ「うつとおしいからザクツとな」

ぎゃああああああ!!!

シーク「ちよつ、リイ!!?」

リイ「それじゃ次回も楽しみにしててね!!」

シーク「いや、作者・・・」

土日にも更新するよう頑張ります。

シーク「な、何で!!!? さっきは・・・ていうか終わり!!!? ちよつとまつ・・・」

にの九話 ごめん、超短い（前書き）

お久しぶりです。

マジごめんなさい。マジごめんなさい。マジごめんなさい。
後タイトルどおり短いです。

マジごめんなさい。マジごめんなさい。マジごめんなさい。

にの九話 ごめん、超短い

「一回戦第一試合はナルシスVSマオ・サキモリ!!!!!!」

え え え え え え え え え え ! ! ! ! ! ?

何で!!!? 何でナルシストとマオウがこの大会出てるの!!!? ?

「説明しよう。」

後ろから話しかけられ振り返るそこには、

「ライム！！？それにフウガも！！？」

・多分ウィルもいるな

「な、なんでこんなところに“風の申し子”と“紅き雷帝”が？」

私に連れられ振り返ったギアがそう呟く。

二人のことだろうか？・・・悔しいぐらい格好良い二つ名だ。

「質問で返して悪いがお前何で俺らの二つ名知ってた？俺が住んでたジールニオンもフウガが住んでたルネイスもプロビンスナインからかなり遠いんだが。」

ギアの弦きにライムがこたえる。

へえ・・・ライムはジルニオンに住んでたんだ、速く行きたいな。俺もハンターなんだよ。業界じゃかなり有名だぞ？“最たる異端”と“黒き十字架”とセットで。」

「あはは・・・」

だからなんでそんなに格好良いんだ。

「それから分家だが同じ四門だから俺は。遠いがよく他の四門の情報は入ってくる。」

「！お前……サキモリか。」

そういえばフウガの名字のカエデって四門なんだったつけ。

「まあそれは置いてくとして……」

ライムが話の流れを変える。

「何故俺たちがここにいるかというと……」

『賞金100万ウォン!!?』

彼らはそのチラシに書かれている金額を見て思わず叫び、お互いの顔を見て頷く。

『参加だな。』

『ああ・・・』

『そうだ。マキ達も誘つか!!』

『どうせなら組むか?』

『ああ、そうしよう。まあ人数的に7:3ぐらいでいいか?』

『つつかそんなにあっても逆に困るし9:1でいいぞ。』

『えっ、マジで!?!』

「「ぶちやつけ、金目当て。」」

「とりあえず二人とも全力で殴るからこっち来て。」

拒否権は?

あるわけ無いじゃん♪

わーい♪

「よし、逃げるぞ。フウガ!!!」

「OK!!!」

「あはは♪待てええええ!!!」

さあ、リアル鬼ごっこの始まりだ。

それを見ながらふとギアは思う。

「この大会って賞金ないはずなんだけど・・・」

場所は変わってどっか

「さあ、面白はすぐそこだ。」

その時を思い浮かべ彼は小さく笑う。

にの九話 ごめん、超短い（後書き）

リイ「ワン。ースって面白いわね。」

いきなりどうした。

シーク「今の話もとても面白いよ。」

まあ、そうだけど。

リイ「じゃあそれに出てきた責め苦やろうか。」

そういうことが畜生おおおお！！！！

シーク「まあ待って、リイ。理由ぐらい聞いておこつよ。」

お前の良心に感謝する。

リイ「そうね。で、この過去最低の更新の遅れの理由は？」

社会的に言うところ・・・

シーク「うん。」

職務怠慢。

「よし、やろうか。」

ぎゃあああああ！！！！！！！！

本当にすいませんでした。

にの十話 太陽は昇り始めるゝ2ゝ

「・・・滅せよ、“ヘル・カイゼルフレイム”!!!!」

「待て、リン!!!周りの被害も・・・ぎゃああああ!!!!!!」

「フウガああああああ!!!!!!」

リン・ライム・フウガのリアル鬼ごっこ♪

現在鬼リン、脱落者フウガ、etc・・・

「な、なんだあれ・・・」

その様子を見て思わずナルシスは呟く。

「・・・さすがリン。僕の認めた漢^{オンナ}。」

マオはそう言いながらライムを追い詰めてきているリンに親指を立てる。

「評価の基準が壊れてないかお前。」

「・・・面白こそが我が全て。」

どっかの天使もどきと気が合いそうだ。

「・・・それよりいいの?降参しなくて。」

その言葉は分だけでは皮肉のようだが、本人にはその気はまったくなく。

言われた本人もまったく気を悪くしてない。

「確かに、あの三人の一人である君に勝つのは難しい。」

七年前突然大量の魔物が各地の町などに押し入る事件があった。

それはほとんどの町がなんとか魔物を退けた。

しかしここプロビンスサインの退け方はとても特殊だった。

魔物たちが町に向け進行しているとき偶然ある三人と出会った。

町のものが気づき討伐軍を出した時にはもう遅く。

その三人によって魔物たちは全滅していた。

その三人こそがマキ、マナそしてここにいるマオ。

「でも僕は引くわけにはいかない。」

彼のその目に宿る意思は強い。

それを汲み取ったマオは問う。

「・・・何故、そこまで燃えているの？僕には理解できない。」

「簡単なことだ。この大会に優勝すれば・・・」

そこでナルシスは言葉を切る。

彼は優勝した時のことを少し想い、そして言葉を続ける。

「改名できるんだ！！！」

「絶対に僕は負けるわけにはいかない！！！」

「てめええええ！！！！！」

マオのその言葉の意味をすぐに理解し、叫ぶ。

「・・・改名するだと？ふざけるな！！！」

「大真面目だ！！！」

「・・・言葉でいってもお前には届かないようだね。」

「それはこっちのセリフだ。」

そしてマオは審判のほうを向く。

「・・・始めて。」

「どうやら両者準備はよろしいようですね。それでは一回戦第一試合、始め！！！」

その言葉とともにマオは後ろに下がる。

「水鞭“シャルス”」

その言葉とともにマオの右手の水の鞭が現れる。

すぐにそれを握り一度それを左の方に振り上げた後ナルシスに向け振るう。

それが自分のとこに来る前にナルシスは右足を前に力強く踏み込みそれを軸に左足を蹴り上げる。

その蹴りは見事鞭を砕き、水の欠片が辺りに散ばる。

ナルシスはマオの方へ駆け出し間合いを詰めていく。

「変われ、水剣“シャルス”」

そう呟くことにより鞭は形を変えレイピアのような細身の剣となる。それでマオは向ってくるナルシスを突き刺す。

しかしその突きをナルシスは膝を折りしゃがむことで避ける。

そして左手をリングにつかせ右足を回してマオの足を払おうとする。マオは忌々しげに顔を歪めながら跳んでそれを交わす。が、ナルシスは笑い、マオの表情も変わらない。

ナルシスは足払いのためにまわした右足をそのまま回しながら、左足だけで跳び、空中で避けることのできないマオに回した右足での回し蹴り。

マオは剣を縦に構えさらにその後ろに左腕を構えそれをガードしようとする。

しかし、剣は碎かれ、左足のガードごとマオは吹っ飛ぶ。二回バウンドしながらもその勢いを利用して立ち上がる。

「湧け、癒しの象徴。今我が敵を飲み込め、“ウェイブ”!!」

左手を前に突き出す。

そこから水が現れ、ナルシスは波のように向う。

それに対してナルシスは波に向って二、三步助走をつけて跳ぶ。

その後空中で無理やり腰を回しながらの右の回し蹴りを波に向けて繰り出す。

それにより波は碎け、ナルシスはそのまま着地し、マオを見据える。

「湧け、癒しの象徴。今我が敵を飲み込め、“ウェイブ”!!」

（なっ・・・また!?!）

マオは先ほど破られた魔法をもう一度放つ。

「血迷ったか!!!!」

ナルシスも先ほどと同じようにその魔法を迎え撃つため跳ぶ。

その時ナルシスを見た、マオが微笑んでいるのを。

「続けて、波よ、今我が敵を捕らえよ。“アレスト”!!」

（発展魔法!!?!）

波はその動きを変え、ナルシスの四肢を捉える。

「続けて、水よ、今形を為せ。“スライム”!!」

今度はナルシスに碎かれてただの水になっていたものが集まりスライム状になる。

「最後に、“アレスト”、“スライム”、今一つとなれ!!」

スライム状のものがナルシスに向って伸び、ナルシスを捕縛している水もそれに向うように伸びていき一つとなりナルシスを空中で固定する。

「最初の時にやらなかったのはこの為か!!」

「ふっ・・・」

その問いかけに対しマオは笑みで返すだけ。

そして右手をナルシスに向け、

「さあ、チェックメイトだ。」

「舐めるなあああ!! 轟け、破壊の象徴!!」

ナルシスの前方に雷が現れる。

それに対応してマオも、

「湧け、癒しの象徴!!」

自分が出せる最大の量の水を出す。

「雷の帝よ、今ここに出でよ、我が敵を打ち砕け」アレクサンドル

”!!”

「海の王者よ、今ここに出でよ、全てを飲み込め」リヴァイアサン

”!!”

片は五メートルほどの剣を持った巨人、方は十メートルほどの長さをもつ海竜。

ともに上級魔法、種類としては雷の“アレクサンドル”有利、魔法量はマオの魔法の“リヴァイアサン”有利。

「行け!!」

偶然にも二人の声は重なる。

まず“アレクサンドル”がその剣を地面に平行に構え突き出す。

“リヴァイアサン”はその口を開き突っ込む。

剣は簡単に“リヴァイアサン”を貫くしかし“リヴァイアサン”は止まらない。

そのまま右腕で“アレクサンドル”の頭を払う。

それにより頭は吹っ飛び、倒れる。

そこで“リヴァイアサン”も力尽き倒れる。ただしナルシスを巻き

込んで。

「う、うわあ、あああああああ！！！！！」

ナルシスを捉えていた拘束もそれで壊れ、リングに落ちる。

「ワン！ツー！スリー！！・・・」

審判のカウントが始まる。

ナルシスは立ち上がろうとするが身体がピクツと震えるだけで動かない。

「エイト！ナイン！テン！！！！勝者マオ・サキモリ！！！！」

おおおおおおおお！！

周囲からは歓声の雄叫び。

これでまず一試合目が終わった。

くそ・・・ははっ、優勝はおるか一回戦負けか・・・

「改名・・・したかったなあ・・・」

ナルシスは空を仰ぎながら呟く。

「・・・ねえ、ナルシスト。」

「ナルシスだ。」

まあこの会話はとりあえずスルー。

「・・・なんでそんなに改名したいの？」

マオは本当に不思議そうに尋ねる。

「そんなの当たり前だろ！！こんな名前・・・」

「・・・お前の親は何も考えずにその名前を付けたと思うの？」

「！？」

そつえば・・・昔聞いたことがあった。

『ねえ、父さん・・・なんで僕にこんな名前付けたの・・・？』

その子は泣きながら尋ねる。

『そんなの決まってるじゃないか。』

『えっ……』

『ナルシストになってほしかったからさ!!』

『……』

涙は止まっていた。

うん……帰ったらあのクソオヤジぶん殴ろう。
親に恵まれなかった男、それがナルシス。

にの十話 太陽は昇り始めるゝゝ（後書き）

リイ「元ネタ公開タ〜イム！！！」

シーク「い、いえーい・・・」

リイ「さあてまずは“アレクサンドル”！！」

またの名をアレキサンダー、おそらくほとんどの人の名前くらいは知っている古代の王。詳しくは覚えてないが自分の国から東に遠征し、どんどん国を落とし支配下にした。ただその遠征から戻るときに病死。

シーク「ゼウスの子だったという話もある。」

リイ「次は“リヴァイアサン”！！」

某RPGでとても有名な悪魔。巨大な海竜で七つの大罪の“嫉妬”を象徴している。

シーク「その名は“とぐろを巻いたもの”、“集って壁になるもの”という意味がある。」

リイ「それではこんな駄作ですがこれからよろしく頼むわ！！」

シーク「感想・評価待ってます！！」

次の話も楽しみに待っていてくれたら嬉しい。

にの十一話 太陽は昇り始める〜 (前書き)

今回は二試合。

にの十一話 太陽は昇り始める〜3〜

試合に勝利し、マオは周囲のざわめきを無視しまっすぐリン達がいるところに向う。

足音で気づいたのかリンはマオの方に振り返り、マオだと認識するとすぐにマオに駆け寄った。

「マオウー！！凄かったね、おめでとう！！！」

「…ありがと、リン」

リンはとても興奮した様子でマオの勝利をねぎらう。

「ああ本当なかなかだった凄かったぞ、マオ」

「戦ってるの見たことなかったけど結構強かったんだな、お前」

フウガとライムもリンに続いて賞賛の言葉を送る。

「そういえばマオ、一つ頼みがあるんだが……」

「えっ？な……」

フウガ達の方を向き何なのかを聞こうと思ったところで絶句。

「…助けてくれ！！！」

そう、涙目になりながら二人は叫ぶ。

何故ならフウガ達はギザギザした物の上に正座して座らされ、腕は後ろ手に縛られ、膝には石畳が二個ほど置かれていたから。

「…ええっと……拷問？」

マオにはちよつとした疑問を言ったただだった。だが、

「あははは、拷問だったら終わりがあるのになあ……」

「気をしっかり持てええええ、フウガ！！！」

もうなんか相当追い詰められてるわけで……

「…ね、ねえ、リン。そろそろ……」

さすがのマオも助け舟を出すことにした。が、それを遮って、

「気にしなくていいよ、マオウ」

「…い、いや……」

「気にしなくていいよ、マオウ」

「…で、でも……」

「気にしないでいいよ、マオウ」

「…そうだね、リン……」

マオ敗退

「マオオオオオオオオ！！！！」

「凄げえ、あのマイペースの代名詞って呼ばれてる兄貴を黙らせた」

「何、そのあだ名！！？」

「ていうかもうお前でいい！！頼む、サキモリ！！助けてくれ！！」

なんで会ったばかりの奴のために危険冒さなきゃいけないんだよ？

byマナ（ギア）

ですよねーbyライム・フウガ

「それでは二試合目の抽選を始めたいと思います！！」

突如響く声。その声で二人はハツとなる。そしてお互いの顔を見て頷きあい、

「リ、リン。俺たちも選手だし紙見たいんだが・・・」

「この格好じゃ見れないからこれらどかしてくれねえ？」

「うーん、確かに……ちよつと待つてね」

そうしてまずライムの腕の縄を解こうとする。

（しめた！！）（くそおおお！！！！ライムが先か！！）

もちろん二人は逃げる気まんまん。

まあ先の奴が逃げたら警戒されるから後の奴は逃げられないが。しかも、

「はいー浮かびあがってますよ」

「これで良んだよね？」

「ちくしょおおおおお！！！！！！」

見る前に試合に出る二人が決まったら実行すらできない。

まあとにかく二人が決まったので審判がマイクを握り二人の紹介を

する。

してその二人とは。

「一回戦第二試合はマキ・サキモリVS誰かA!!!!!!」

『片方扱い悪ッ!!!!!!?』

会場のほとんどのものが心を一つにして叫んだ。

「へえゝ珍しい名前だね」「…そうだね、リン」

→例外達

「両者準備はよろしいですか？」

その言葉に二人は言葉を出さず、頷く。

それを確認した審判は、

「それでは一回戦第二試合、始め!!」

マイクを持つていない左腕を掲げながら高らかに宣言した。

Aは開始と同時に腰に提げていた鞘から右腕で剣を抜き構えることなくだらんと腕をぶらつかせながらマキに突っ込み、自分の剣の届く間合いに入ったところで剣を振り上げる。

キーンンン!!!!

「!?!」

しかし、なにかそこに壁があるかのように剣は最初の位置からほとんど変わらない場所で止まった。

マキはその様子を自身の細い目で見つめながら少し微笑み、ゆっくりとした口調でコードを紡ぐ。

「聳えろゝ守りの象徴ゝ」

霧因気が台無しだ。

「今ゝ全てを守りゝ敵を退ける要塞となれゝ……」

プリントアウトされた大量の紙が散ばり足の踏み場もないような部屋で彼はパソコンに向っていた。部屋には彼のキーボードを打つ音だけが響く。ブブッー!!!!

「だあああ！！クソツ！！」

突如違う音が響いたのと同時に彼はイスを四本の脚うち二本だけでバランスをとり、後ろに倒れないように後ろにうな垂れながら叫ぶ。

「さすがにガードがかてえな。」

今度は左手で軽く頭を掻きながら呟くと、立ち上がり散ばった紙を踏むのを気にせず、この部屋の窓まで歩き、それを開けて外を見る。そしてそこから見えるビル群の中で一際目立つ高層ビルを見つめる。

「待つてろよ……てめえらの悪事は絶対この桐生鉄叉様が暴いてやる！！」

「“ダイキギョウ”！！！！」

『何この小劇場！！？』

とりあえずそれは置いて、コードを完成させた後マキは両手をリングに向ける。

すると盛り上がるように魔法は形成されていきピラミッド上になる。そして頂上にいる、マキは沈むようにその中へ入っていく。

「さあ〜ここまで〜来てみなさい〜テッサ君〜」

『そいつ鉄叉違うから！！！！』

テッサはその誘いに乗りピラミッドを駆け上っていく。

『そいつテッサ決定なんだ！？』

「いきますよ〜続けて〜歯向かいし〜敵を〜迎え撃て〜……」

この町一帯を見下せれるほどの高さにある部屋で彼は大量の仕事を捌き、途中でその手を止め一息吐く。

コンコン その溜息と同時にノックの音が響く。

「入れ」

彼の言葉を聞き、ノックをした秘書らしき人物が部屋に入り、用件を伝える。

「社長、最近我が社のことを嗅ぎまわっている者がいるのですが…

…」

「そうか……」

それを聞くと彼は両肘をつき、この前で手を組みながら、ゾツとするような無表情で、

「構わん、消せ」

「ケンリヨク」！！！」

『だからなんだよ、これ！！？』

頂上の部分の土が集まり球状になり、テッサに向って転がり落ちる。

それをテッサは横に飛びのくことで避ける。

だが、着地に失敗しそのまま転がり落ちる。

「今ですゝ続けてゝ土よゝ今、全てを蹂躪せよゝ……」

「ぐあつ……！！」

路地裏、ビル群の奥で陽の光があまり届かず昼だと言うのに当たりは薄暗い。

そこに彼……桐生鉄叉は突然数人の男に連れ込まれ乱暴に投げられた。

鉄叉は急いで振り返り、自分をここまで連れてきた奴らを見る。

明らかに堅気ではなさそうな雰囲気、即座に彼らが何者なのかを

悟った。

「始末屋って奴か……」

「理解が早くて助かる」

クソっ……こんな所で死んでたまるか！！

あいつを……漣を助けなきゃいけないんだ！！

「うおおおおおおお！！！！」

彼は男たちに向って右腕を振りながら駆け出す。

彼の大切なものを守るために。

ダン！！！！

だが、無慈悲にも彼の命を奪うであろう引き金は引かれた……

「ケンリヨクコウシ」！！！！

『鉄叉ああああああ！！！！』

ピラミッドの半分以上が分解する。

隠れていたマキもそれにより姿を現す。

分解された土は集まり十数個の塊となり、テッサに向って跳ぶ。

転がり落ち、ちょうど体勢を立て直したばかりだった彼にそれを避

ける術はなかった。

「ぐあああああ！！！！」

二、三個ほどあったところでマキは魔法を解く。

そこには気絶したテッサの姿が。

「勝者、マキ・サキモリ！！！！」

審判はテッサの姿を見て数えるまでもないと判断し、勝者の名を叫ぶ。

おおおおおおおお！！！！

一試合目のように周囲から歓声が、マキはそれに笑顔で手を振りながらリングを降りていった。

「よし、じゃあ今度こそ見るから解いてくれ、リン!!!」

抽選が始まるとすぐにフウガはリンに逃げたいがためにリンにこの拷問もどきから開放してくれるよう懇願した。

「うん、分かった」

「あ、ああ、ありがとう」

フウガの懇願にリンは笑顔で了承した。

しかし今までのことを思い、フウガは何か違和感を感じた。

まあ気にしないことにしてフウガはどうやって逃げようか考えていたのだが、リンが最初の笑顔にままでフウガに顔を近づけていき、

「逃げたらどうなるか……分かってるよね」

最後の部分を強調してかつフウガにしか聞こえないような声で囁いた。

「はははははいいいいいい!!!」

それはフウガですら恐怖させるのに十分な迫力だった。

「うん」じゃあ解くよ?

フウガの返事を聞くといつもの明るい笑顔に戻ってリンはフウガを拷問もどきから開放する。

「おっ……!」

もう自棄になって自分の紙を取り出し見てみると、そこに3の文字が浮かび上がっていた。

「じゃあ俺行ってくる」

そして後ろでリン達に手を上げながらリングへと歩いていった。

「……! フウガの浮かび上がったんだ。頑張ってるね」

「おっ」

「一回戦第三試合はジンVS誰かC!!」

「Bは!!!?」

選手の名前が宣言されまたもや会場のほとんどのもの心が一つにな

る。

「ジン？」

リンはまたもや例外達だった。

しかし前とは違い、フウガであろう人物がジンと呼ばれていたからだ。

「なんで偽名使ってるんだろう？」

「あいつにはあいつの事情があるんだよ。」

思わずこぼれたその言葉にギアが答えた。

「知ってるの、ギア！？」

「さあ、なんなんだろうねえ」

すぐにリンはそのことを尋ねたが、ギアはそう言うだけでそのことについては何も言わなかった。

「それでは一回戦第三試合、始め！！！」

そうこうしているうちに試合が始まってしまった。

「開け、東の門。“風蹴”」

始まってすぐフウガはそう呟いた。

多分その時すでに勝敗は決まっていたのだろう。
瞬間フウガがそこから消えた。

そして誰かCの前に現れ、そのまま神速のハイキックを、それにより誰かCは数メートル中を舞い、それからリングぎりぎりのところでちょうど止まった。

「……しょ、勝者、ジン！！！」

あまりの圧倒振りに審判も呆気に取られていた。

「なあ兄貴。」

「……何、ギア？」

「何であいつあんなに強いのにリンに逆らえないんだ？」

「……！？さ、さあ……」

にの十一話 太陽は昇り始める〜（後書き）

シーク「フウガってなかなか強いね」

リイ「ふん、私の方が強いに決まってるわ!!」

うん、そうだよ。

リイ「くっ、私よりもつよ・・・ってええええ!!?」

どうした?

シーク「素直に認めたからじゃない?」

つかリイって現在メインメンバーの中で最強だぞ?

リイ「マジっすか!!?」

マジ。つかライムより強いって間接的に書いてるだろ。

リイ「そ、そうなんだ……」

ちなみにリイ>フウガ マナ（ギア）||ライム>シーク ウィル

リンは?ってな感じ。

まあそんなに実力差はないよ。

シーク「?なんでリンは?なの?」

?ばっかだな。まあストーリー上の問題。まあこんなところで閉めますか。

リイ「そうね、まあこんな風に閉め方が苦しく、文才がない作者が書く駄文ですが……」

さすがに泣いちゃうぞ。

シーク「これからもよろしくお願いします。」

感想・評価待ってます。

太陽は昇り始める　ゝ4ゝ（前書き）

めちゃくちゃ遅れました……

理由としては年度が変わり、環境が変わってしまったせいでそれに対応するだけで精一杯で書く時間がありませんでした……
次は多分一週間以内に更新できると思います。

太陽は昇り始める　　4

自分の勝利を確かめた後、まっすぐリン達のところに歩き出す。
おおおおおおお！！！！

ちょうどリングから降りたところで呆然としていた観客たちが歓声を挙げる。

この歓声は俺が引き起こしたものだと思うと悪い感じはしない。
「フウガ様……！」

この試合で俺の場所が分かったマキが俺の方に駆けてきた。
偽名使ったんだからせめてジンって呼んでくれよ……

「流石です、フウガ様……！」

俺の近くに来て開口一番俺を褒めだした。

しかしマキは昔から変わらないな……いつも俺を過剰に褒める。
それでいて俺が女と一緒にいるだけでも般若のように怒り出す。本
当でだろうか？

「フウガ……」

リンも俺の元にやってきた。そして、

「はあああ……！」

「ゴフツ……！」

俺の鳩尾を腰を落として左腕を後ろに引きながら右腕で突いた。
前に倒れそうになった俺を支え、どこからか出したあのギザギザの
上に正座させ、後ろ手に縛る。

マキもあまりのことに目を丸くしている。

「ギア……！」

「……はい」

サキモリがリンに呼ばれて二つ重なった石畳を運んできて俺に乗
せ……圧力と鈍い痛みของハーモニイイイイ……！！

「な、何やってるんですか……！」

マキがやっとなまをを取り戻し、リンを止めようとする。

が、リンが、マキに近づきマキにしか聞こえないぐらいの声で耳打ちすると、

「もう一段乗せましょう」

「マキイイイイ!!?」

予想外の驚きに思わず叫んでしまった。

バカな、マキが俺を裏切るなんて、一体何が!?

「フウガ様の浮気者!!」

「謎は全て解けた!!」

何言ってくれてるんだあのやろう!!!

「ワタシ、ナニモイテナイヨ」

ああ、もうムカつく。

「何やってるんだ、君たちは……」

突然聞きなれた声がしたので振り返って見ると予想通りアス、それにフウキとリンたちの知り合いの……たしかウイルだったな……がいた。

マキと同じで俺がいる場所に気づいてきたのだろう。

「ウイル助けてくれ!!」

ライムがウイルに助けを求める。

俺は常にリンの意思を尊重するbyウイル

このシスコンがbyライム

どうやら断られたようだな。だが、まだフウキとアスがいるし……

「フウガ、悪いけどわいは助けて」

なっ、何故だ!!

だってマキおるしbyフウキ

賢明な判断だな畜生byフウガ

「「こうなったら、アス!!」」

最後の望みを賭け、アスに助けを求めた。

助けるメリットがデメリットより圧倒的に少ないb yアステめえ、試合あったたら覚えてるよ？b yライム・フウガ

「それでは第四試合目の抽選をします」

ふとお馴染みになってきたその言葉が響く。

その言葉ですでに一回戦の出番がないものを除きここにいるものが一斉に自分の紙を見る。

「おっ……僕の出番か……」

アスの紙には4の文字が浮かび上がっていた。

アスがリングに上がろうとするとちょうど隣の人もリングに上がろうとしていたのでアスはその人を見てみる。

その人はセルス地方のものがよく着る……たしかキモノというものを纏った女性だった。

とても綺麗な黒い髪で一瞬見惚れた。

その人もこっちを見る。

なんとなく雰囲気を知り合いの喋りだしが遅い彼に似ている。

「……あなたが……私の、対戦者……？」

喋り方はマオよりもひどかった。とりあえず肯定する。

「名前、は……？」

断る理由もないしどうせ後で言うのだからそれに答えた。すると彼女は首をかしげながら、

「……偽名、じゃなくて……本名で……」

「！？」

何故分かった？そう言いたいのに言葉が出ない。

まさか、こいつは……

「いいたく、ないのなら……別に、いい……私は、アン……いい、試合を、しよう……」

それだけ言っていると彼女は審判の方へ向った。どうやら違ったみたいだ。ほっと一息ついてから僕も審判の方へ向った。

「それでは一回戦第四試合始め!!」

「覆え、迷いの、象徴、今、彼のものの、視界を奪え、“ノワールナイト”」

試合が始まったとともにアンは魔法を発動する。アンの両腕から黒き闇が現れ、それはリング全体を覆う。

「あいつ、闇魔術師か!」

その様子をみて思わずライムは叫ぶ。

「たしか、闇魔法はああいうので相手の視界を奪うのが定石なんだよね」

リンはかつてライムに教わった闇魔法のことを思い出しながら言う。

「ああ、しかも使用者自体はあの闇の中のことを手に取るように分かるからなお厄介だ」

「だが、あいつには通用しねえ」

「……!?」

フウガが突然割り込みアスの不利を否定し、続けてその理由を説明していく。

そんな様子を眺めながらウィルはふと思った。

（二人とも、セリフだけ見たらかつこいいなのに、格好のせいで台無しだ……）

詳しくは……思い出せ！！

「炎弓、“チュアリス”」

アスは闇を恐れず、炎の弓を出現させ堂々とそれを構える。その様子を感じてアンは驚愕する。

何故なら明らかにアスはアンに向けて弓を構えていたからだ。

アスは右手である程度矢を引き、そして放つ。アンは反応が遅れたもののなんとか矢を避けた。

（偶然か……？）

しかし、この考えは動くアンに合わせて弓を動かすアスの様子により否定された。

「何故ならあいつは最大半径五キロ以内のものの全てを把握する能力、サーチャーだからな」

つまりアスは有効範囲内ならどこに、どんなものが、どのような状態であるのかが分かる。

だから視力などアスには不要、だからアスの視界を奪うことは限りなく無意味。

（どうやら……“ノワール・ナイト”は……通用、しないよう……でも、あなたは……私の闇の中……）

アンはアスの弓に注意を向けながらリングの端へと走り出した。

（まさか……）

アスはなんとなくアンを狙いに気づいた。

それに対応するため射撃を止めコードを紡ぐ。

「進め、侵略の象徴。炎よ、異物の進入を許すな、“ファイアー・ウォール”！！」

炎がアスを中心に円形に展開され、闇を退けていく。

それと同時にアンが闇から抜け出す。

「覆え、闇の、象徴……」

まずアンは闇を補充する。

「続けて、闇よ、今、全てを抉れ、“クリムゾン、ナイト”」

リングを覆っていた闇は、無数の杭になりアスに向っていく。

アスを守っている炎は杭を防いでいるのだが確実に削っていく。

そしてついに最後の一本が炎を貫きアスに向っていった……

続く

太陽は昇り始める　　ゝ4ゝ（後書き）

リイ「いやああああ！！！！アスどうなるの！！？」

さあ？

シーク「やけに冷静だね？」

そりゃ俺、作者だしどうなるか知ってるしねえゝ

リイ「くっ！！作者特権か！！！」

はっはっは！！！！誰が優勝するかももう決まっているぞ！！

「じゃあ速く書け！！！」

俺だって速く書きたいんだよ！！！！

「ごめん……」

……次はもう少し速くこうしたいと思います。

にの十二話 太陽は昇り始める〜5〜 (前書き)

久しぶりだな……

久しぶりだよおおおおお!!! 週一更新!!!!

にの十二話 太陽は昇り始める〜5〜

「闘技場、リング」

アスを守っていた炎が消えていくそこには俯いた無傷の人がいた。いや、正確に言うとな無傷ではない。

その人の足元には三つ網にされた黒っぽい茶色の髪が落ちていて、その人自体の髪は千切られたように不格好だったから杭はその人の髪を貫いたのだろう。

だからこそその人物は間違いなくアスなのだろう。

だがアンには、いやこの戦いを見るもの全てがその人物がアスだとは思えなかった。

なぜならそいつはどう見ても女であつたから。

「男装、を……して、いった、っていう、オチ……？」

「少し違う」

アンの呟きにアス（？）は律儀に答える。

「正確に言うと男になっていたんだ」

アス（？）はそのまま言葉を続ける。

「でも、それもお前に髪を切られたせいでもう無理だ」

乾いた笑いをしながらアス（？）は顔をあげる。

「この落とし前とつてもらうぞ……」

一切の感情を込められずに放たれた殺気は幾重の戦場を生き抜いてきたアンですら恐怖した。

でもアンはその恐怖を振り払ってアス（？）に立ち向かう。

「私は死ぬわけにない。」

さっきまでの途切れ途切れの口調ではなく、はっきりと言う。

「何故？」

「何故か？簡単なこと、私には仕える人がいるから、大切な仲間が

いるから、守るべき人がいるから！愛した人がいるから！！」

「そう……」

その言葉を聞きアス（？）は俯くそしてまた顔をあげた時の、その時の表情は……

「私にはいない。仕える人も、仲間も、守る人も、愛した人もいない……もういないんだあああああ！！！！」

その叫びとともに変換コードを言ってすらいらないのに炎が現れる。その表情はいまにも泣き出しそうな見るものを同情させそうな表情だった。

「進め、侵略の象徴！！」

さらに炎が現れる。あまりの熱量にアス（？）の姿が陽炎のように揺らぐ。

「炎よ、全てを奪え、全てを屠れ、全てを蹴れ、全てを征服せよ！

！！“バイベルス・コクリュート”！！！！」

炎は無数の人に変わり、アンに向っていく。

「覆え、闇の、象徴」

アンも黙ってそれを受ける気はなく、対抗するために闇を出現させる。

「夜の、一つよ、今、現れよ、闇の、力、もちて、全てを屈服させよ……“ヴァンパイア・ナイト”！！」

姿を変えた闇は蝙蝠の羽が生えた人型……吸血鬼になる。

吸血鬼が奮う腕は炎の征服者たちを薙ぎ倒していく。

しかし、征服者たちの数には敵わず、征服者たちの波に吸血鬼は飲み込まれていた。後は無防備なアンのみ。

（申しわけありません……私は先に逝きます……あなた……）

そして、アンは死ぬ前に最愛の人がいる方を向こうとした。

「！？」

そして気づいた、そいつの存在に。

「ウィル……？」

“バイベルス・コクリュート”が“ヴァンパイア・ナイト”を破り、後はアンだけという時にアンを守るように、いや実際に守るため、“バイベルス・コクリュート”の進路上にウィルは立った。

“グラジエル”を眼前に構えた後、右肩より振り上げる。

「ブライト」

その言葉で“グラジエル”の刃の部分が光に変わり、十メートルほど伸びる。

「ブレイド……！」

そう叫びながら縦に振り下ろす。

近くまで来ていた征服者をそれで何体か切り捨てる。

振り切った後で光が柄から離れ五メートルほど飛び、

「バスター……！！！」

爆発。

爆風でウィルとアス（？）の髪が跳ね上がる。

それで征服者たちは全滅した。

跳ね上がっていたアス（？）の髪が降りる。

それと同時にアス（？）は右腕を地面と平行になるように横に上げる。

「邪魔を……」

右手を開く。

するとそこに一本の槍が現れる。

その槍はもともついている刃の他にもう一つ刃がついていた。

その槍が落ちる前に掴み、

「するなあああああ……！！！！！」

右腕を後ろに下げながら右足を一步前に踏み出し下げていた槍を振り、思いつきり槍を投げる。

その槍は真っ直ぐとウィルに向っていく。

「光剣“グラジエル”……！」

刃を失っていた柄に再び刃が現れる。

今度は右方向に横に引き、槍に備える。

「……!!?」

だが突如槍は空中で止まった。

ウィルもアス(?)も驚愕する。

「駄目ですよ喧嘩は」

二人は一斉に声がした方を向く。

そこには右手を槍のほうに向けながら微笑んでいるマキがいた。

「アリス」

アス(?)……アリスに向ってマキは手招きをしながら呼ぶ。

「髪……切りそろえてあげる」

その言葉を聞き、アリスは自分の髪を触ってみる。

触ってみて、確かに切りそろえなければ不格好だなと思う。

「……いい」

でも今は人に何かを頼めるような気分ではなくそれを断る。

「いいから来なさい」

しかしマキはその否定の言葉を聞き入れず、アリスに近づき右腕を掴むと無理やり連れて行った。

「……勝者、アス」

アリス達がリングを降りたところで思い出したように小さくアリスの勝利が告げられた。

いままでと違い歓声はおこらず闘技場の中庭は静寂に包まれていた。アリスを引きずっているマキに対して出番待ちの選手たちは今まで殺気だっていたのが嘘のようになしく道をあける。

ウィルはどんどん遠ざかっていくアリスの背中を見えなくなるまで見つめていた。

〳闘技場、回廊〵

闘技場の中庭からでて回廊に着いたところでマキはハサミを取り

出す。

アリスはそれを見ておとなしくマキに背を向けながら思った。
(なんで都合よくハサミ持っているんだ?)

“ 気にしたら負けだよ?”

「……………」

マキがアリスの髪を切りそろえている間、二人に会話はなかった。
「完成」

いつのまにかマキはいつもの様子に戻っている。

そして手鏡をアリスに渡す。

アリスはそれで自分の髪を見てみる、今までずっと長かったせいか、髪自体は整っていたがまったく似合っていないなと思った。

そしてこうなってしまったしまった経緯を思い出し、ふと疑問が出来た。

「なんであいつはアンを助けたんだ……?」

「教えてあげようか?」

その問いに答えたのはマキではなかった。

声がした方を向く。

そこには明るい、それゆえに眩しいと思えるような笑みを浮かべているリンがいた。

「いつだったかウィルは私に騎士に憧れてるって言ってた。」

私の返事を聞かずにリンは話し始める。

「だからこそウィルは守る。自分の身もかえりみずに守る。自分が助けられるなら手を差し伸べる」

俺たちには? b y ライム・フウガ

細かいこと気にしてんじゃねえよ b y 俺

（アリス視点）

そうか……同じなのかあいつは……

「そんなウィルと一緒にだったからこそ私は……」

リンが何か言っているような気がするが……まあ、いいや。

あいつは同じなんだ……あのころの私と……

「ウィルに伝えてくれないか？」

だからこそ私は……

「お前は必ず殺す」

あいつにも気づかさなければならぬ。

騎士などに憧れる価値はない、騎士とは愚かなものだ。

そう……かつて私のように。

にの十二話 太陽は昇り始める〜5〜（後書き）

さあて、アス＝アリスに気づいていた人っていたかな？」

リイ「ふ、ふん。私は気づいて……」

シーク・俺「「なかつたんでしょ（だろ）？」」

リイ「ぐっ……」

シーク「リイ、見栄なんてはらなくていいよ。だってリイは素でも十分素敵なんだから」

リイ「シーク……」

そこ惚気るな。ついでに言うと伏線自体は張っていました。

シーク「例えば？」

これ自体は直接的じゃないけど紹介の時アスだけ性別分かつてるはずなのに書いてない。

リイ「マジッスか？」

マジッス。他にもあります。気づけた方は是非言って下さい。ギアが褒めます。

ギア「何で、俺!？」

それでは感想・評価をギアが待ってます。

ギア「マジでやるのか!!!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1237f/>

太陽は昇る

2010年10月10日02時43分発行